

遠心力ポテンシャル

動径方向のシュレディンガー方程式 (121) の第 3 項が遠心力であることの説明。

\hat{L}^2 の固有値が $\ell(\ell+1)\hbar^2$ であることより、この項は波動関数 $\psi(\mathbf{r})$ に作用する演算子として

$$\frac{\ell(\ell+1)\hbar^2}{2\mu r^2}\psi(\mathbf{r}) = \frac{\hat{L}^2}{2\mu r^2}\psi(\mathbf{r})$$

と書ける。以下、古典力学で中心力ポテンシャルを極座標表示すると、動径方向の運動エネルギー以外に上の表式に対応する項があらわれ、遠心力と解釈できることを示す。

位置座標 \mathbf{r} にある古典粒子 (質量 μ) が中心力ポテンシャル $V(r)$ 中で運動している。エネルギー E は運動エネルギーとポテンシャルエネルギーの和なので

$$E = \frac{1}{2}\mu\mathbf{v}^2 + V(r)$$

角運動量は

$$\mathbf{L} = \mu\mathbf{r} \times \mathbf{v}$$

成分で書くと

$$L_i = \mu\epsilon_{ijk}r_jv_k$$

よって角運動量の 2 乗は

$$\begin{aligned} L^2 &= \sum_i L_i L_i \\ &= \mu^2 \sum_{ijklm} \epsilon_{ijk}r_jv_k\epsilon_{ilm}r_\ell v_m \\ &= \mu^2 \sum_{ijklm} \epsilon_{ijk}\epsilon_{ilm}r_jv_kr_\ell v_m \\ &= \mu^2 \sum_{jklm} (\delta_{j\ell}\delta_{km} - \delta_{jm}\delta_{k\ell})r_jv_kr_\ell v_m \\ &= \mu^2 \left(\sum_{jklm} \delta_{j\ell}\delta_{km}r_jv_kr_\ell v_m - \sum_{jklm} \delta_{jm}\delta_{k\ell}r_jv_kr_\ell v_m \right) \\ &= \mu^2 \left(\sum_{jk} r_jv_kr_jv_k - \sum_{jk} r_jv_kr_kv_j \right) \\ &= \mu^2\mathbf{r}^2\mathbf{v}^2 - \mu^2(\mathbf{r} \cdot \mathbf{v})^2 \end{aligned}$$

これより

$$\frac{L^2}{\mu r^2} = \mu\mathbf{v}^2 - \mu\left(\frac{\mathbf{r}}{r} \cdot \mathbf{v}\right)^2$$

であるが、 \mathbf{r}/r は \mathbf{r} 方向の単位ベクトルなので、 $\mathbf{r} \cdot \mathbf{v}/r$ は速度の r 方向成分である。これを v_r と書くと

$$\frac{\mathbf{L}^2}{\mu r^2} = \mu v^2 - \mu v_r^2$$

となるので、運動エネルギーは

$$\frac{1}{2} \mu v^2 = \frac{1}{2} \mu v_r^2 + \frac{\mathbf{L}^2}{2\mu r^2}$$

と書ける。よってエネルギーは

$$E = \frac{1}{2} \mu v_r^2 + \frac{\mathbf{L}^2}{2\mu r^2} + V(r)$$

とかける。中心力では角運動量が保存するので、第1項を（動径方向の）運動エネルギー、残りを有効ポテンシャルと見做した r に関する1次元運動と考えることができる。元のポテンシャル $V(r)$ に加えて、回転運動からくる

$$\frac{\mathbf{L}^2}{2\mu r^2}$$

がポテンシャルに追加されている。この項は常に正であることから斥力であり、 r 方向の力を計算すると

$$F_r = -\frac{d}{dr} \frac{\mathbf{L}^2}{2\mu r^2} = \frac{\mathbf{L}^2}{\mu r^3}$$

等速円運動の場合、 $v = r\omega$ で \mathbf{v} と \mathbf{r} が直交するので $|\mathbf{L}| = \mu r^2 \omega$ 、これを代入して

$$F_r = \frac{(\mu r^2 \omega)^2}{\mu r^3} = \mu r \omega^2 \quad (\text{等速円運動})$$

となり、遠心力を表していることがわかる。

1/r のラプラシアン

公式 (129)

$$\nabla^2 \frac{1}{r} = -4\pi\delta(\mathbf{r})$$

の説明。

ナイーブには、 $r \neq 0$ のとき左辺が 0 になることと、ガウスの定理より

$$\int \nabla^2 \frac{1}{r} dV = \int \nabla \frac{1}{r} \cdot \mathbf{n} dS = - \int \frac{\mathbf{r}}{r^3} \cdot \mathbf{n} dS = - \int \frac{1}{r^2} dS = - \frac{4\pi r^2}{r^2} = -4\pi$$

より、 $r = 0$ の点で $-4\pi\delta(\mathbf{r})$ となることを示すが、この導出ではガウスの定理を特異性のある \mathbf{r}/r^3 という関数に使っており、厳密ではない。しかし最終的に同じ等式が得られるので、簡易的な説明としてよく使われる。

そもそも左辺は $r = 0$ で微分できないことから通常関数として定義されておらず、超関数として考える必要がある。超関数⁶は、テスト関数をかけて積分した値を返す汎関数（関数から数への写像）として定義される。また、超関数の微分は、テスト関数の微分を通じて定義される。超関数として定義した式 (129) の意味は、 $r = 0$ で正則な関数 $f(\mathbf{r})$ を用いて

$$\int d^3r \frac{1}{r} \nabla^2 f(\mathbf{r}) = -4\pi \int d^3r \delta(\mathbf{r}) f(\mathbf{r})$$

が成り立つことである。左辺のラプラシアンが $f(\mathbf{r})$ にかかることに注意。右辺は

$$-4\pi \int d^3r f(\mathbf{r}) \delta(\mathbf{r}) = -4\pi f(\mathbf{0})$$

であるので、左辺がこれに等しいことを示す。原点を中心とした半径 ϵ の球領域を V_ϵ 、全空間から V_ϵ を引いたものを V'_ϵ とすると

$$\int d^3r \frac{1}{r} \nabla^2 f(\mathbf{r}) = \int_{V_\epsilon} d^3r \frac{1}{r} \nabla^2 f(\mathbf{r}) + \int_{V'_\epsilon} d^3r \frac{1}{r} \nabla^2 f(\mathbf{r})$$

右辺で $\epsilon \rightarrow 0$ の極限を取ると、第 1 項は ($f(\mathbf{r})$ が原点に特異性がないので) $\sim 4\pi\epsilon^3/3\epsilon$ となり消え、

$$\begin{aligned} \int d^3r f(\mathbf{r}) \nabla^2 \frac{1}{r} &= \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \int_{V'_\epsilon} d^3r \frac{1}{r} \nabla^2 f(\mathbf{r}) \\ &= \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \int_{V'_\epsilon} d^3r \left[\nabla \cdot \left\{ \frac{1}{r} \nabla f(\mathbf{r}) \right\} - \left(\nabla \frac{1}{r} \right) \cdot \nabla f(\mathbf{r}) \right] \\ &= \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \int_{V'_\epsilon} d^3r \left[\nabla \cdot \left\{ \frac{1}{r} \nabla f(\mathbf{r}) \right\} - \nabla \cdot \left\{ \left(\nabla \frac{1}{r} \right) f(\mathbf{r}) \right\} + \left(\nabla^2 \frac{1}{r} \right) f(\mathbf{r}) \right] \end{aligned}$$

⁶超関数についてはライトヒル「フーリエ解析と超関数」(ダイヤモンド社)などを参照。

V'_ϵ では $r \neq 0$ なので第3項は $\nabla^2 r^{-1}$ が常にゼロで消える。また、 $r \neq 0$ より第1,2項の被積分関数に特異性はないのでガウスの定理と $\nabla r^{-1} = -\mathbf{r}/r^3$ が使え、

$$\int d^3r f(\mathbf{r}) \nabla^2 \frac{1}{r} = \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \int_{\partial V'_\epsilon} dS \mathbf{n} \cdot \left[\frac{1}{r} \nabla f(\mathbf{r}) - \frac{\mathbf{r}}{r^3} f(\mathbf{r}) \right]$$

ここで $\partial V'_\epsilon$ は半径 ϵ の球面で \mathbf{n} は $\partial V'_\epsilon$ の法線ベクトルである。第1項は ($f(\mathbf{r})$ が原点に特異性がないので) $\epsilon \rightarrow 0$ で $\sim 4\pi\epsilon^2/\epsilon$ となり消え、第2項は $\mathbf{n} \cdot \mathbf{r} = r$ に注意すると

$$\begin{aligned} \int d^3r f(\mathbf{r}) \nabla^2 \frac{1}{r} &= - \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \int_{\partial V'_\epsilon} dS \frac{f(\mathbf{r})}{r^2} \\ &= - \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \frac{4\pi\epsilon^2}{\epsilon^2} f(\mathbf{r})|_{|\mathbf{r}|=\epsilon} \\ &= -4\pi f(\mathbf{0}) \end{aligned}$$

となる。これは右辺に一致する。